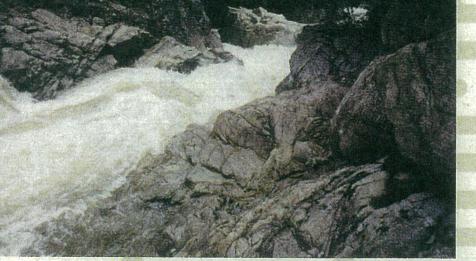




大戸川流域 風土資産マップ



国土交通省近畿地方整備局 大戸川ダム工事事務所

大戸川のあらまし 「水七合に砂三合」

大戸川(だいとかわ、だいどかわ)は、近江盆地の南縁、滋賀県信楽町多羅尾屋瀬谷に源を発し、信楽盆地を貫流した後、田上山地と金勝山地のあいだを分け入り、大津市市上盆地を経て市原津、太子で瀬田川に合流する。全長は約38km。愛知川につづく、県下6番目の長さをもつ川である。

滋賀県の河川のほとんどすべてが琵琶湖へ流入するのに対して、大戸川は直接淀川に合流する。大戸川は信楽多羅尾屋瀬谷に源を発して、淀川を集めて瀬田川に注ぐ。このうち、河川名が知られているものを数え上げると、少なくとも信楽町28川、大津市11川にのぼる。

大津市市上大鳥居町から牧町にかけては山間せまり、「田上耶馬渓」の異名をもつ古来交通

の離所であった。この渓谷中ほどに流域最大の滝、不動の滝がある(滝の近くに不動がある)。江戸時代の書物「淡波録」では、滝音が草津の山田や矢橋でも聞こえる、と記されるほどに近隣にその名をとどめかす滝があった。

主に花崗岩から成る信楽山地、田上山地など周辺山地の土砂を豪雨のたびに下流に流し、大戸川の流れは「水七合に砂三合」といわれてきただ。大戸川はこのように、流域の人びとにとって、田畠の恵みをもたらす一方で、その度合とない氾濫は水とのたたかいの歴史でもあった。また、南郷洗堰が建設されるまで、大戸川は瀬田川との合流点に中州をつくり瀬田川の流れをさまたげ、琵琶湖の水位上昇の原因の一つであった。

川名「大戸川」のおこり 大戸の滝(不動の滝)に端を発する

現在は、大戸川本川は上流から下流まで同一の名称、「大戸川」(だいとかわ、だいどかわ)とよばれているが、かつては流域のそれぞれで信楽川、雲井川、田上川、黒津川など、独自の呼称をもつていた。

「大戸川」の名は、宝永4年(1707)に上田上の牧村・中野村において河道が現在の田上山地の山裾に付け替えられて以降、それまでの「田上川」から「大戸川」と称されるようになったとされる。また、不動の滝は、別名を大戸の滝といい、江戸時代の書物には「大塔瀧」(「淡波録」1697年)、「瀧」(「近江地志略」1734年)として紹介されている。このようなことから「大戸川」はもともと、不動の滝あるいは牧村・中野村のあたりで

のよび名であったようである。

「大戸」の意味するところについては、大きな峡谷、滝あるいは水が激しく流れる所(あるいはその入口)、道が上下左右に変化歩きにくい所(あるいはその入口)などと考えられているが、いずれにせよ大戸川の流れに深く関わる地名である。

大戸川の水系



大戸の滝(不動の滝)



山がおりなし川がつらぬく大戸の大地

■ 大戸川流域、名のある 二十八山

雨乞い行事の山巒を残す。流域の最高峰 笹ヶ岳(739m)。甲斐と伊賀をさす山の中央部 高峰山(710m)。天平の文化が生えた秀峰 丹波山(693m)。紫香楽宮の鬼門守護 犬籠の名山 飯道山(684m)。湖南から見えた最高の山 丹波山(671m)。湖岸から見えた最高の山 田上山(671m)。田上山の主峰、太神の御座す 不動山(太神山)(600m)。歴史・文化を秘めた、金勝の最高峰 金勝山(612m)。多羅尾屋の奥山 ゴモリ山(603m)。雨乞い伝説の「大戸王」を祀る 壱王山(565m)。田上山の主峰、太神の御座す 不動山(太神山)(600m)。信楽の雨乞い行事を残す 笹ヶ岳(483m)。今なお雨乞い行事を残す 笹ヶ岳(483m)。御殿跡をひそむす 田上山の前衛 境山(384m)。

■ 信楽の名山(信楽町選定)

雨乞い行事の山巒を残す。流域の最高峰 笹ヶ岳(739m)。甲斐と伊賀をさす山の中央部 高峰山(710m)。紫香楽宮の鬼門守護 犬籠の名山 飯道山(684m)。多羅尾屋の城跡を残す 犬ヶ岳(562m)。

■ 大戸川流域 山の奇石怪石七傑

不動寺の鐘乳、影向石。

構造山、金剛の山のつときわ目立つ 鶴峯

山崩れが残されたといいう巨石 鶴頭(かげん)岩

だれが積んだか、重ねた?

雨乞い出で、田上山の前衛 境山(384m)。

開拓の神をまつる 豊臣山(369m)。

祠石の靈廟、山崩れの山頂 天狗石(275m)。

祠石の靈廟、山崩れの山頂 天狗石(275m)。</p

